

## ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況について

ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況を調査した結果、保毒虫率は県平均で2.3%ですが、県南部の一部でやや高い地域が見られました（表1・図1）。一方、麦類の生育や収穫作業の遅れからヒメトビウンカの本田への飛込みも遅れたと考えられ、県南部における縞葉枯病の初発は6月25日頃で、前年（6月20日頃）よりやや遅れました。

ヒメトビウンカ第一世代幼虫の保毒虫率は昭和50年代には高く推移しましたが、その後、広域防除によりヒメトビウンカが減少し、抵抗性品種の導入によって保毒虫率も低下しました（図2）。しかし、近年、本病の発生が増加し、昨年は県南部で8月下旬の発生株率が4割を超える多発ほ場や、越冬世代の保毒虫率調査で要防除水準（10%）を超える地域が見られました。このため、県南部の保毒虫率が高い地域では、今後も本病の増加が懸念されます。

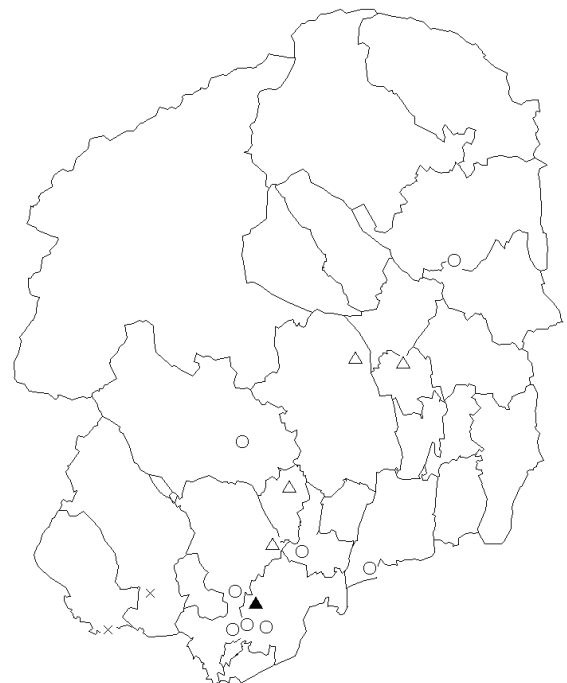
後期発病の穂の出すくみや奇形等（図3）を含む縞葉枯病発生株率が10%を超える場合は、次年度の対策が必要となります。ほ場をよく観察し今後の発生状況に注意しましょう。

表1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率

地点名		H23	H24
県北	大田原市蛭畑	0.0	1.8
	那須烏山市大桶	0.0	-
	高根沢町花岡	0.9	0.9
県央	芳賀町西高橋	0.0	-
	真岡市青田	1.8	2.7
	宇都宮市芦沼町	0.9	0.9
	上三川町上三川	0.9	-
	鹿沼市酒野谷	1.8	1.8
県南	下野市小金井	0.9	1.8
	小山市下石塚	5.5	-
	小山市小袋	5.5	8.2
	小山市石ノ上	2.7	3.6
	小山市寒川	9.1	2.7
	壬生町助谷	0.0	0.9
	栃木市惣社町	1.8	0.9
	栃木市大平町真弓	5.8	4.5
	栃木市藤岡町富吉	1.8	-
	栃木市藤岡町蛭沼	3.6	3.6
	佐野市小中町	-	0.0
足利市高松町	0.9	0.0	
県平均		2.3	2.3

5月下旬～6月上旬に麦類ほ場から採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫を検定。

検定数：110頭 検定方法：DAS-ELISA法



国土地理院承認平14総複第149号

保毒虫率(%)	0	0.1~0.9	1~4.9	5~9.9	10以上
記号	x				

図1 イネ縞葉枯病ウイルス保毒状況  
（平成24年5月下旬～6月上旬）



H8年～20年はイネ縞葉枯病、ヒメトビウンカが少なかったため検定を中断。

保毒虫検定：H7年以前はラテックス凝集法、H21年以降はDAS-ELISA法。

図2 ヒメトビウンカ第一世代幼虫保毒虫率の推移



図3 縞葉枯病の症状

左：前期発病（ゆうれい症状）

右：後期発病（穂の出すくみ、奇形、葉鞘褐変）

### 【防除対策】

本田での発病状況を確認し、穂ぞろい期以降に縞葉枯病の多発生が見られた場合は以下の対策を行う。

ヒメトビウンカが、縞葉枯病に感染した再生稲を吸汁することによって保毒虫率を高める恐れがあるため、秋耕はすみやかに行う。

畦畔等の雑草地はヒメトビウンカの越冬場所となるため、ほ場周辺の除草を徹底する。

発生が多い地域では、縞葉枯病抵抗性品種「あさひの夢」の作付けを検討する。

罹病性品種（コシヒカリ、なすひかり等）を作付する場合は、アドマイヤーCR 箱粒剤[ウンカ類]、ダントツ箱粒剤[ウンカ類]またはこれらを含む箱施用剤を使用する。

**フィプロニル箱施用剤(商品名プリンス粒剤等)は、栃木県内で薬剤感受性が低下したヒメトビウンカが確認されているため、県南部(特に下都賀地域)では罹病性品種に使用しない。**

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

（ 028 - 626 - 3086 ）